



『ビア・シンしかないけど、OK?』

そう言って彼女は僕の肩にさりげなく手を置いた。

カウンター越しに客と世間話に花を咲かせている赤いミニスカートの女の奥には、トレードマークの金色の獅子が描かれた「ビア・シン」の電飾看板が切れかけた蛍光灯を点滅させている。うだってしまうような南国の太陽の熱気の余韻がまだ残る宵闇のなか、僕は彼女の運転する車に乗せられ、この町はずれのバーに何も知らされないままに連れられてきていた。

東南アジア、タイ。首都バンコクから北部随一の街・チェンマイへと向かう途中にあるランパーンと呼ばれる町に僕はいた。ガイドブックに二ページだけ掲載されているここは、今でも馬車が数少ない観光客を乗せてアスファルトで舗装された道を走るのどかな町だった。

数日前、タイ暦の正月をチェンマイの安宿で過ごしていた。一年でいちばん暑い時期に行なわれる正月はソンクラーンと呼ばれ、老若男女問わず道行く人に水を掛け合うことで、来たる年と豊作を祝う祭りが行なわれていた。祭りの賑わいを避けるように僕は、小さな路地に面した安宿の中庭に出されたプラスチック製の椅子に腰掛け、昼間からビールを飲み、日記を書いたり、暗唱ができるくらいに何度も読み返している文庫本を広げたり、ブーゲンビリアに止まる蝶を眺めたりしながら、旅のなかのゆるやかに流れる時間を満喫していた。明日を考えなくていい日々は、日毎に僕の脳の歯車を狂わせ始め、朝起きて夜眠るまでのあいだ、結局屋台で飯を食べた以外は外出しないという入院患者のような一日を過ごすことだってあった。

その日も僕はいつものようにビールを何本も開け、皮膚を焦がすような日射しを浴びながら、中庭で時間を浪費していた。

『ねえ、ライターを貸してもらえない？』

たどたどしい英語で話しかけてきたのは、背の低い女性ふたり組みだった。お互いタイ語できゃっきゃと笑い合いながら、テーブルの上のライターを指差していた。

『どうぞ』と差し出すと、痩せた茶色の髪の女が微笑みながら受け取り、細い煙草に火をつけた。

『ありがとう』といった茶髪の女の口から漏れた紫煙は、ねとつくような湿度のなかにゆっくりと消えていった。

『あなた、日本人？』

隣にあったプラスチックの椅子に腰掛けながら、聞かれた。さりげなくパラソルの作った日陰に移動したのが、タイの女の子らしかった。

『そう、日本人。タイ人に見えた？』

『色黒かったから、思わずタイ語で話しかけちゃうところだったわ』

『よく間違われるんだ。さっきだって、ここでビールを飲んでいたら、チェックアウトしたいからってルームキーを渡された』

何の役にもたたない、酔っ払いのくだらない冗談に、彼女たちは笑った。

『旅行しているの？』

『そうだよ。君たちは？』

『私たちが旅行中。お正月休みをとってバカンスに来ているの』

『うそよ。彼女は彼氏に会いにチェンマイに来たの』

今まで隣で笑っていただけだった黒髪の女は、片言の英語でそう言い茶髪を小突くと、また笑った。

『そうなの。実はこの宿で彼氏と待ち合わせをしているの』

茶髪の彼女は、ジェシカと名乗った。本名はカンヤラット何とかと言うらしかったが、長くて覚えられないので、彼氏は君のことを何て呼んでいるの？ と聞いてイングリッシュ・ネームを教えてもらった。もうひとりの黒髪は、シリポ何とか。イングリッシュ・ネームはないそうで、友達の間ではポムと呼ばれていた。

ジェシカとポムに囲まれながら、僕はさっきよりもやや速いペースでビールを空けた。くだらない会話。僕がどれくらい旅をしているか、年齢、日本での仕事、今までにどこへ行ってきたかなどを話しているうちに、吸っていたタバコも残りわずかになっていた。

太陽も傾き始めた頃、ジェシカの彼氏が宿にやってきた。『会いたかったよ！』なんて大げさに叫びながら、ジェシカはタトゥーとピアスだらけのドレッド男の胸に飛び込んでいった。今にも裸になってしまいそうな勢いで抱き合うふたりの側で、ポムは手持ち無沙汰そうに視線をそらしていた。冷えたビールも飲みたかったし、タバコも買ったかった僕は、『コンビニに行かない？ 冷えたビールをおごるから』とポムを誘ってみた。うん、とうなずいて椅子から立った彼女の胸や尻の肉付きのよさが、ほろ酔いの視覚を通すと、甘ったるくねちっこい完熟のパパイヤのように映った。

タイで一般的に売られているビールにはいくつかの種類があるが、そのなかでも僕がいつも飲んでいたのは、緑色のラベルに象が二匹描かれている「ビア・チャン」というビールだった。このビールの味が好きで飲んでいただけではなかった。それでも飲み続けていたのは、このビールがタイで売られているビールのなかでももっとも安かったため、飲んでいるうちに慣れてしまったというだけの理由でしかなかった。

「ビア・シン」は、シンハ・ビールとも呼ばれるタイを代表するビールで、酒屋で買うと大瓶が四十五バーツだった。百三十五円ほどでビールが飲めるというのは物価の安いタイならではだと思いが、ビア・チャンはさらに安い三十五バーツだった。たった三十円ほどの差しかなく、ここ数年物価が上昇しているというタイで、十バーツで何が買えるかといっても、せいぜいミネラルウォーターが一本買えるか、ガムひとつか、そんなものくらいしか買えないだろう。それでも、安いほうに手が伸びてしまうのは、これまでの旅で身につけてしまった癖だった。

年中暑いタイでは、ビールのグラスにも氷を入れて飲む。時間が経つとともにビールは溶けた氷によって薄くなっていく。本当は味が濃くしっかりしているビア・シンのほうが、そういったタイ・スタイルの飲み方に適していて美味しいのだが、それでも僕は、十バーツを余分に払うのが嫌で、安いほうばかりを飲んでた。

抱き合うふたりに軽く合図をし、宿から出て、蝉の鳴き声とバイクの排気音に囲まれながら、コンビニまでの道をゆっくりと歩いた。

セブン・イレブンの扉を開けると、能天気なチャイムが鳴り響き、店内の冷気が一瞬にして僕たちの体にまといついた。店のいちばん奥にある冷蔵庫には、日本のそれと同じように、棚にびっしりとジュースやビールが冷えていた。

『どのビールがいいの？ ハイネケン？』とポム。

『いつもはビア・チャンを飲んでいるんだ』と僕。

『欧米人（ファラン）は皆ハイネケンばかり飲むわ。ジェシカの彼氏だって、そう』

『僕はファランじゃないよ』

『あなたは日本人（コンイーブン）よ、知ってるわ』

『だからって、ハイネケンが嫌いなわけじゃない』

『わかってる。ビア・チャンが好きなんですよ』

と子供をあやすような口調で、ポムは6本入りのビア・チャンを三つかごに入れると、ずしりと重くなったかごを両手で持つ僕を横目に、レジのほうへ歩いていった。

『ビア・シンでもいい？　ビア・チャンは置いてないんだって』

彼女の声で、ランパーンのバーカウンターに意識が戻される。数日前のチェンマイでの時間は、まだ僕のまわりに漂っているような錯覚を覚えた。

『何でもいいよ、バドワイザーでも』

白で統一されたバーカウンターの向こう側では、店のコンセプトに合わせて作られたっぽい赤いシャツを着た店員があわただしく働き、スミノフやジャック・ダニエルといったハードリカーのボトルがガラス棚にきれいに並べられている。カウンターの隅には、DJブースらしいものがある、その傍らにはiMacが置かれており、開かれたiTuneが液晶画面に映し出されていた。

タイでMacを見るのは、バンコクの電腦ビルであるパンティッププラザ以来だな、なんて思い出しながら、僕は深く考えることもなくそれらの光景を受け入れ、一箱五十バツするL&Mというタバコを口にくわえていた。

黒の超ミニスカートからすらりと伸びた足がやけに強烈なインパクトを放っていた女が、僕の前にビア・シンを、彼女の前にコーラを置いて、タイ人らしい微笑みを浮かべ、彼女と何やら二言三言会話をし、僕の方を少し見たあと、また仕事へと戻っていった。

『彼女、あなたが日本人だと知ったらびっくりしてたわ』

彼女が僕の手元にあったタバコの箱を手に取りながら、そう言った。

Soul Flyという名のこのバーは、まだ夜の八時だというのに満員に近い賑わいだった。大音量でスピーカーから垂れ流されている九十年代後半風のちょっとポップ気味なアメリカの音楽と、酔い始めた客たちの会話の音が、たった隣に腰かけている彼女の声も消し去ってしまうほどだった。僕は慣れないタイ語と英語を混ぜながら、大声で彼女に話しかけなければいけなかった。

彼女のくわえたタバコに点る炎を見つめていると、

『ねえ、あなたは……いるの？』

「え？」

声が僕まで届かないだけなのに、彼女は自分の言葉が僕に伝わっていないと勘違いしたらしく、もどかしそうにちょっといらだちながら、紫煙を吐き出して、わかりやすすぎるような英語で、

『あなたは　いつまで　ここ　に　いるの？』と繰り返した。

アナタハ　イツマデ　ココ　ニ　イルノ？

アナタハ イツマデ ココ ニ イルノ？

いったいつまで僕はこの町にいることになるのだろう。その答えは決まっていなかったし、しばらくの間、決めるつもりもなかった。

僕は、半年前に発作のように突然に仕事を辞め、日本社会に渦巻くあわただしさから逃げるように、旅行という名目で海外へ出ていた。会社を辞める直前、学生時代からの友人と仕事の愚痴を肴に浴びるほど深酒をしていくなかで、話題はいつしか東南アジアになっていた。北海道の魚をおいしく食べさせる居酒屋で、小気味よく働いていたのがミャンマー人だったということがきっかけだったかもしれないし、隣のテーブルで会話をしていたOL風の二人組みの会話がアンコールワットだったのに影響されたのかもしれない。居酒屋のラストオーダーとともに、僕と友人は河岸を変え、朝を迎えるまで飲んだ。

仮眠をとるために上がり込んだ友人の家の本棚に、東南アジアのガイドブックが並べてあった。タイのゴーゴー・バーでの友人の武勇伝を聞かされながらページをめくっていると、金色に輝く仏像群や色とりどりのフルーツが並ぶ活気溢れる水上市場の写真が、酩酊気味の僕の脳に電気ショックのように火花を散らした。突き抜けるように激しい太陽光を照り返す金色の微笑みの仏陀。芳しく熟れる発酵した果実。風になびく純白のアオザイを着た少女。大きな翼を青空にはためかせる鋭い嘴のガルダ。茜色に染まるチャオプラヤー川に行き交うフェリーボート。雨に濡れて涙を流すバイヨンの四面像。ライトアップされた錫色のペトロナス・ツインタワーの無機質な刹那さ。そのどれもが息をして、「生きている」ようだった。まだ足を踏み入れたことのない南国の湿気と芳香がいつの間にか僕を包んでくれていた。

朦朧としてくる意識のなかで、僕は酔い覚ましのミネラルウォーターをがぶ飲みしながら、友人の寝言のような旅行話に耳を傾けていた。

旅行会社のカウンターで言われるがままに買った安い航空券でタイのバンコクに着くことから、始まった初めての一人旅。慣れないことだらけで心身ともに磨耗しながらも、頭のなかだけは冴えていた。あの時、写真を通して感じた熱気とも言うべき何か突き動かされるように、世界各地からやってきた旅人たちからの情報を頼りに、バンコクからカンボジア、ベトナム、ラオスとインドシナ半島を反時計回りに巡った。毎日洪水のように押し寄せる観光地を巡り、市場で買い食いをして、寺院で手を合わせ、道行く野良犬に吠えられ、安宿の硬いベッドで眠る。そんな日々が過ぎていった。いったい何回シャッターをきって、何を撮ったのだろう。その瞬間に感動していたことだけは覚えているが、何に感動していたのかなんて、ちっとも記憶になかった。いつしか非日常的な旅は日常になり、サンダル履きの足の裏はこすっても落ちない汚れで黒ずんでいた。当たり前過ぎる景色に退屈をしながら、ただ惰性で歩を進めているにすぎなかった。

ラオスの古都ルアンパバンという町で知り合った日本人旅行者からマリファナをもらい、ねっとりとした紫煙に包まれ、ぐるぐると回るメコン川沿いの景色のなかで、もう旅をしていても意味がないという思いと、こんな自堕落な生活を手放したくないという思いの挟間で揺れ動いていた。

しかし、本当のところは、旅に疲れていた。身体も、精神も。

慣れない土地に、慣れない食事、通じない言葉。水ひとつ、タバコ一箱買うのだって値段交渉をしなければいけないような国ばかりを巡り、重い荷物を背負い、おんぼろのバスに揺られ、安宿を探し求めることに、そんな旅行が億劫になり始めていた。中国の国境を望むラオスの小さな町の、ゴキブリが数匹床をはいずりまわっている汚い安宿のベッドの上で、これから進む予定だった広大な中国の地図を広げた時、僕は突如吐き気に襲われ、うんこのこびりついた共同トイレに駆け込んで、ゲエゲエと胃のなかのものを残らず吐いた。薄暗い裸電球のまわりを見たこともないような蛾が飛び回っていた夜のことだった。便器のなかにたちこめるアンモニア臭がさらに吐き気を増幅させ、もう胃液すら出なくなるまで吐き尽くした時、僕は自分の旅の限界を感じた。フラフラになりながら自分の部屋に戻り、まだベッドの上に広げられていた中国の地図をビリビリに割いて窓から投げ捨てた。

もう進む気はなかった。これ以上進んでも、いったい何があるっていうんだ。国が変わり、貨幣が変わり、言葉が変わるだけで、僕の求めていた「何か」なんてあるわけがないじゃないか。

掘っ立て小屋が一軒建っているだけのバスターミナルと呼ばれる空き地の横の安食堂で、冷えていないビールをあおって、さっきまでハエがたかっていた肉とたまねぎの炒め物とカオニャオと呼ばれるもち米を口に運んだ。暑すぎて犬も日陰で倒れているような炎天下のなか、割れたバスの窓をセロハンテープで補修していた運転手らしい男が、一仕事を終え、僕の隣に座った。店の太った女主人にラオラーオと呼ばれる焼酎を注文し、タバコに火をつけてうまそうに吸った。

『どこ、行く？』

片言の英語で、男は話しかけてきた。

『とくに決めてないよ、中国にでも行こうかと思ってる』

『中国、来た、昨日』

そう言って、ハンドルを持つ真似をした男。前歯のない口が、大きく開かれ、笑った。

『どこ、行く、明日？』

片言の英語で、僕は聞き返した。ふちの欠けたガラスコップに並々と注がれたラオラーオを半分ほど飲み干した男は、道路の先を指差し、

『タイランド』と、もう一度笑った。『タイランド、来る、今夜。お前、タイランド？』

中国からタイへと向かう国際バスを操る親父は、今夜タイへと向かうと言った。目的も何も見失った僕には、屋根が今にも落ちてきそうなこのボロバスに揺られ、旅の振り出しに戻るのというのも悪くないかもしれない。

『いつ、バス、出る？』

『セブン！』

その夜七時、僕はすべて荷物を持って、夕闇のバスターミナルに立っていた。

『何を考えているの？』

彼女は横から僕の脇腹をつつきながら、微笑んだ。

『旅のことを思い出していたんだ』

『ふうん』

彼女はとくに興味もないそぶりでつぶやいて、自分の携帯電話を触り始めた。そう、僕は今、ランパーンという町にいる。

店内にある巨大なスクリーンには、イングランドのサッカーの試合が映し出されていた。コーラのポスターなどでよく目にする黒人の有名選手がピッチの上を走っていた。

ふと店内を見回してみたが、このサッカーの試合に興味をもって見ている客はほとんどいないに等しかった。画面の右上にはLIVEと描かれている。イギリスのどこかの都市にあるスタジアムでは、国家予算並みの金額を数年で稼ぐプレイヤーたちが球を蹴り、数え切れないほどの大観衆が一喜一憂している。けれど、今僕がいる、そこから数千キロ離れた東南アジアのこの国では、皆が酒を飲み、知人たちと語り合うことに熱中し、誰も彼らのプレーには関心をもっていない。スピーカーからは実況やスタジアムの音は一切伝わってこないけれど、代わりにiTuneに入れられた音楽が流されていた。この熱狂の差は、はるか遠くて決してお互いに伝わることはないものだということが、理解できた気がした。スタジアムに入りきれない人々は、地元のパブでビールを片手に選手のプレーひとつひとつに野次を飛ばしていることだろう。味は異なるけれど、ビールを飲んで画面を見つめる僕は、タイの小さな町のバーレストランで、無音の画面をただ眺めているだけだ。

『おもしろい？』

携帯遊びを終えた彼女が、僕の腕に腕をからませながら、そう聞いた。

『そんなにおもしろいわけじゃないけれど、つまらないわけでもないよ』

そう自分の気持ちを表現してしまってから、自分の発した言葉がひどく日本人的なのもかもしれないと気づき、

『僕はサッカーが好きなんだ』と付け足した。

『私、サッカーのことはよくわからないんだけど……』

彼女はコーラの入ったグラスを持ち上げ、ストローで二回三回くるくるとなかの氷をかき混ぜたあと、

『チームは、リアル・マドリッドが好きなの』と言って、また微笑んだ。

『ひょっとしてデビット・ベッカム？』

ベッカムは、キレのある右足からのパスで、全世界の観客を魅了していた。

『そう、そうなの！ 彼、かっこいいわ、ものすごく！』

すごく、と興奮気味の彼女は強調した。

『それにしてもあなたはサッカーに詳しいのね。男の子はみんなサッカーが好きだわ』

『そうかな？』

『そうよ』

レアルの選手と聞かれて、僕が答えることができるのは、ラウルやロナウド、フィーゴなどの、誰でも知っているといっても過言ではないくらいの超有名選手くらいだ。それなのに、彼女は僕のことをサッカー通のように言った。それが僕にはもどかしかった。次の言葉が見つからなかった。当然だ。会話がつなげられるほど、僕にサッカーの知識があるわけじゃない。

コーラを美味しそうに飲む彼女の横には、グッチのバッグが大切そうに置かれていた。一昨日、週末に開かれるナイトマーケットで、彼女にねだられて買ってあげたものだ。といっても、これは当然、コピー。本物をいとも簡単に買ってあげられるほど、僕は金持ちじゃない。言い値で千二百バーツだったところを小一時間ほどねばって、七百バーツにまでまけさせて、それでも考えに考え、悩むに悩んで、財布を取り出した代物だった。

彼女は今時のタイ娘らしく、ブランド品に目がなかった。

ナイトマーケットには、普段町で見かけるような食べ物の屋台や果物ジュース、お菓子の類の露店のほか、いかにもタイという象をあしらったような民芸品、古本、アクセサリーなどの露店がひしめきあっていた。この町にいったいこれほどの人間がいるのか、昼間の様子からは想像できないほどの人数が、マーケットを冷やかしながら、それこそ芋を洗っているような状態で、のろのろと道を歩いていた。

僕は、彼女に手を引かれながら、暑さと人の多さにへとへとになって彷徨していた。どこからともなく漂ってくる美味そうな苺やふかしたての中華饅頭などの匂いを敏感にかぎわけていると、さっき屋台で麺を食べたばかりだっというのに、もう空腹を覚え始めていた。しかし彼女は、そんな僕の心のなかを察してくれることもなく、ただひたすらに人混みを巧みにかき分けながら、前へと進んでいた。あらかじめ彼女には向かってくる障害物となる人がどのように動くのかわかっているように、それはまるで熱帯の森に飛ぶ極彩色の蝶のようにひらひらと華麗に見えた。

そんな蝶は得てしてきまぐれで、彼女は突然歩を止める。このまま進むのだとばかり思っていた僕は、思わず彼女の履いていたミュール越しに足を思いきり踏みつけてしまった。

彼女の口から漏れた、とっさのタイ語は、なんだか間が抜けたように聞こえて、思わず嘔き出してしまった。

『ごめん』と、笑ってしまいそうになるのをこらえながら、覚えたてのタイ語で彼女に謝った。彼女はそんな僕の不埒な謝罪はまるで無視をして、怒るでもなく、不機嫌になるでもなく、

『このバッグかわいいね』と立ち止まったところの真横にあった、ブランド品のコピーばかりを扱う露店に見入っていた。

グッチ、プラダ、ルイヴィトン、コーチ……。日本でもお馴染みのブランドのロゴが並んでいた。財布、ベルト、バッグ、キャップ、サングラス、多種に渡る品ぞろえは、まるで超一流ホテルに入っているテナントを覗いているようだった。

『このバッグ素敵だと思わない？』

そう言って彼女が並べられた商品のなかから手に取ったのは、グッチのショルダーバッグだった。グッチのロゴってこんな模様だっけと、彼女が嬉しそうに肩にかけたバッグを見ながらそう思った。

バッグのサイドにはピンク色のレザーがデカデカと貼り付けられていて、ブランド品というよりも、ファンシーショップで売られていたほうが似合う品だった。

『似合う？』

愛おしそうにバッグに触れながら彼女は僕に微笑みかけてくる。

こういう時はいったい何と言ってあげたら彼女は喜ぶのだろうか。とても似合っているよ、なんて言うのがいいのだろうか。でもあからさまにピンクの目立つバッグは、彼女のどちらかといえば中華系の地味な顔立ちには、お世辞にも似合っているとは思えなかった。そう言えなかった。まるでバッグが彼女を連れて歩いているような感じ。とはいえ、君にそのバッグは似合わない

という気にもならなかった。せっかく彼女が楽しそうにしているんだし、それに彼女の機嫌を一度でも損ねると元に戻るのには下手をすると丸一日以上かかることを知っていたから。

片手にバッグを、もう片手は僕の肘のあたりをつかみながら、上目づかいで僕を見上げている彼女。やっぱり何かいってあげないといけない状況らしい。迷うに迷った挙句、僕は

『そのピンクよりもそっちのグリーンのほうが似合うんじゃないかな』とだけ返した。

その言葉に敏感に反応し、彼女の視線は僕の頭から露店に並べられたもうひとつのグッチのショルダーバッグに移った。

『そう？ そう思う？ ……うん、そうね』と彼女は僕の苦し紛れに出た言い訳のような軽い言葉を鵜呑みにし、さっきまであれほど気に入っているそぶりを見せていたピンクのバッグを放り投げるように露店に投げ捨て、新たにその横に並べられていたグリーンのそれを手にした。そして、

『じゃあ、これにするわ』と言って微笑んだ。

「えっ？」

『似合っているんじゃないの？』

『似合ってるよ』

「ありがとう。ねえ、おじさん、これいくらなの？」

『えっ？ 今買うの？』

『私、これに決めたわ』

「決めたって……」僕は思わず日本語でつぶやいた。

「ちょっとこのバッグ高くない？ もう少しまけてよ、ねえ、いいでしょ、千二百バーツは高いわよ」

彼女は値段交渉を始めている。どういうことだ、これは。彼女が千二百バーツものバッグを衝動買いきるほどお金を持っているはずはない。ということは、このバッグは僕が買うことになるのだろうか。

心配する僕の隣で、彼女は「ほら、ここが汚くなっているじゃない」と店の男に突き付けるようにまくし立てている。

ねっとりとした身体にまとわりつくようなタイの夜の熱気。ねばっこく濃厚な空気が鼻腔から身体に侵入してくると、深く物事を考えることができなくなる気がする。遠くの露店で焼かれているパッタイと呼ばれる細い米でできた麺の焼きそばの香りがここまで漂ってくるように感じた。砂糖と味の素が入り混じったような、それはジャスミンの香りのような、阿片の燃えた匂いのような。

『ちょっと』

僕の意識はまたバーカウンターに戻された。酔いが回ってきているのだろうか。そういえば、さっきからなぜか音楽が気にならなくなっているような気がする。

彼女の手には、ジャスミンのつぼみをいくつも糸でつなげた、乳白色の花輪があった。

『これ、あなたにあげるわ』

そう言って彼女は僕の首に半ば強制的に花をまとわせた。

『この花、知ってる？』

町を歩いている時、特に寺院の前を通る時に漂っている、南国特有の強い香りが、首の回りから視界を遮るように立ちこめている。

『あなたに、これを、あげるわ』

もう一度、ゆっくりと彼女はそう言って、僕の首元のつぼみをひとつ指でつまむと、隣の席から身体を伸ばし、まるで僕の体臭を嗅ぐかのようにして、ジャスミンの香りを吸い込んだ。彼女の黒髪がファンの風に揺れて、僕の鼻先をくすぐる。

『いいにおい。本当に』

『ありがとう。大切にするよ』

そのままの姿勢を保ったまま、僕らはしばらく会話をした。遠くから見たら、キスをしているようにでも見えることだろう。

『でも、明日の朝には枯れちゃうの。大切になんてできないのよ』

彼女はまだ鼻先につぼみを近づけて、上目づかいでそう言った。まるで今すぐにキスをしてくれとせがまれているようにも感じた。

『でも、大切にするよ』

僕は彼女をまねて、もう一度同じことを言った。

『ありがとう』

ゆっくり微笑んだその口元はまるでタイのどこでも見られる仏像のそれによく似ていた。

『忘れないでね、この花のこと』

愛おしそうにつぼみが、彼女の指先から離れ、僕の首元で揺れた。ジャスミンが強烈に香った。

『ちょっと踊ってくる』と言って、彼女は軽く僕のほほに触れると、バーカウンターから離れていった。南国の夜、飲み慣れないビールを飲みながら、僕はジャスミンの残像をいつまでも追っていた。

アナタハ イツマデ ココ ニ イルノ？

そう僕に問う彼女に、深い考えはあったのだろうか。明日にはこの国特有の熱気と湿度によって、カラカラに干からびてしまうジャスミンの花のように、この一瞬を生きているような儚げな彼女をうらやましく思った。と同時に、僕は思考を止めた。

イタケレバ イレバ イイジャナイ。

もし彼女に僕が尋ねたならば、きっこう返すにきまっている。いつしか彼女が言っていた言葉が、何度も何度も暑さでまいってしまった脳裏を巡る。

『タイ人にとって大切なのは、サバーイってこと。楽に生きるってことなの。明日のことを考えたって、どうしようもないじゃない』

ジャスミンの首飾り。ビア・シンの氷割り。サバーイに生きるタイの娘。踊りに夢中でカウンターに置き忘れたグッチのグリーンのバッグ。画面のサッカーは、いつの間にかハーフタイムに入っていた。

それでいいんじゃないか。

僕はそう自分に言い聞かせると、一気にビールを空け、やる気のなさそうな店員にお代りを頼んだ。

(了)